

## 池田治政200年遠諱記念シンポジウム

## “数寄大名”の魅力に迫る

ディスカッションは、熊谷功夫 MIHO MU SEIUM館長（叢史）、元川崎医療福祉大教授の神原邦男氏（日本近世文化）、池田家菩提寺・曹源寺の岡田正道住職が登壇。「池田治政と松平不昧の茶の湯」をテーマで、治政の人物像を大衆へ松山藩主の松平忠利（号・不昧）との交流などを通して探った。司会は200年遠諱に合わせ特別展「池田家の墨と曹源寺」を開催している林原美術館の谷一尚館長。要旨を紹介する。

谷一 それぞれの視点から治政の魅力を語つてほしい。

熊倉 特別展で何より驚かされたのが治政の大書だ。「月」の字には、一边が20歳もあるかという字を押すたまごを置いて、こみがあり、遊び心のある大名だったと感じる。

神原 治政は江戸出府中に神田明神で正室の安達祈願をしている。境内に「千吉千家流開祖の川上不白の茶室があり、交流がある」という心のあらわしが面白い。その辺りの話が面白く残草や残草參りにかかって吉原で吉原で遊んだなどと伝わるが、そつばな、誠実な殿様だったと思う。

岡田 曹源寺は岡山藩主の香取所（菩提寺）として、寺社奉行が管理していたが、治政公が「修行先者にて」と太元改元（神開門）全てを任せ、道場として開放した、「こんな御殿をできる人はめったらない」といっている。

谷一 曹源寺には現在、世界中から人が集まっている。岡田 太元改元禪師の教説を受けた一人に、鎌倉の円覚寺で住職になった黒巣がいる。その弟子が、仏教の難解な教説を訳し世界に伝えた仏教の鉛本大袖。曹源寺には今、16ヵ国の人42人が修行しているが、元をなぞらえ治政公に行き着いていた。

谷一 松平不昧はどのような物だったのか。熊倉 茶道は熱心で、金匱の「古今名物類鑑」を作つて中興名物、大名物などのランク付けをし、近代の茶に非常に大きな影響を与えた。不昧は治政、姫路の酒井宗雅（名茶人）との交流を広げ、その輪をつなぐ不白の茶のグループをついた。

神原 治政と不昧の最初の出会いとして、治政の口元に松山藩から力士を遣したものという話。後楽園で相撲を取らせて、その茶会も開いている。

谷一 「補院落山海」という格好があつて、銀髪のいる補院落山へ行くには舟を運ばなければならぬ。これを治政は茶の湯やう考えるか。向こう岸に寄つて遊ぶという趣向で、非常に面白い。

谷一 治政と茶の湯の関係をどう考えるか。

原田 老中・松平定信の貢業後約に真っ向から反対した。そういう倫理的な精神の裏には、窮屈な人間関係を育てるといふ意識の心があったのです。不昧や治政は非常に熱心にお前前をやつて、茶道の修練法の七事あるが、この時、その名前は権守を一生懸命でした。そういう姿勢が近代的な茶の湯の誕生に結び付いたと思

る一方、後楽園で茶文化や開谷学校の再びに尽力し、文化にも造詣の深かつた第1代岡山藩主の池田治政（1710～1818年）。その200年遠諱を記念したシンポジウム（同）

## ディスカッション「池田治政と松平不昧の茶の湯」

幕府の質素後約令に反発するなど剛毅堅断な性格が知られる一方、後楽園で茶文化や開谷学校の再びに尽力し、文化にも造詣の深かつた第1代岡山藩主の池田治政（1710～1818年）。その200年遠諱を記念したシンポジウム（同）

遠諱記念事業実行委員会 岡山新聞社共催が昨年12月17日、岡山市北区柳町の同社を大ホールで開かれた。茶道愛好した“数寄大名”。その侧面にスポットを当て、研究者が織り広げた討論や講演を振り返る。（福原心也）

## 遊び心感じる「月」の書

MIHO MUSEUM 熊谷功夫館長



## 後楽園で相撲や茶会も

元川崎医療福祉大教授 神原邦男氏



池田家菩提寺・曹源寺 原田正道住職



神原氏基調講演「備前池田家と茶の湯」

“治政流、家臣も熱心に



岡山藩主・池田家や家臣の茶の湯の取り組みを紹介する神原氏

ディスカッションに先立つて神原氏が「備前池田家と茶の湯」と題して基調講演をして、茶を巡る治政や池田家臣の動向を解説した。治政は1779年、参勤交代で帰京予定だった。この約2年間、池田家の江戸屋敷に茶人の川上不白（姫路の酒井宗雅）が出入り、茶会を催し記録が残っている。病気は口臭と思うが、自立した動きはできない。内々で茶の湯を楽しみ、自らも始めただろう。

岡山に治政が戻ると、重臣の速水宗達

が招かれ、後楽園で盛んに茶事が行われるようになる。上級藩士は茶の湯を稽古するよき命じられたようだ。家臣クラスになると御道と呼ばれる家臣まで抱え、京都へ作法を学ばせに行かせられた。

後楽園の竹で作った化粧や備前焼の茶器を使った。治政流の茶との時期に花開いた。当時の茶道、茶事史料として、家臣の履歴図がある。船岡東岸にあった伊本家の下屋敷（郊外の別邸）は広大な庭に多様な植栽と池を配し、二つの御茶屋を備えていた。

伊木家からは幕末に茶人として名高い



治政自作の「カーブ切茶入（箱・茶器）」。通常の倍ほどの大ぶりなサイズが目を引く



治政の豪快な書。『月』（手前）は印のスペースを考えた字体がユニークだ

林原美術館（岡山市北区丸の内）の特別展「池田家の至宝と曹源寺」は28日まで（月曜休館）。池田治政の書画や愛用品、同寺の寺宝など73件を展示している。